

## 一人もとり残されないために

### [聖書] ヨハネによる福音書 20章 19～29節

その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。そう言って、手とわき腹とお見せになった。弟子たちは、主を見て喜んだ。イエスは重ねて言われた。「あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす。」そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。「聖霊を受けなさい。だれの罪でも、あなたがたが赦せば、その罪は赦される。だれの罪でも、あなたがたが赦さなければ、赦されないまま残る。」

十二人の一人でディディモと呼ばれるトマスは、イエスが来られたとき、彼らと一緒にいなかった。そこで、ほかの弟子たちが、「わたしたちは主を見た」と言うと、トマスは言った。「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。」

### [序] 「あなたがたに平和があるように」

今日の聖書の箇所の中で繰り返されている主イエス様の言葉があります。しかも三度も語られています。それは「あなたがたに平和があるように」という言葉です。初めは、家の戸に鍵をかけ、閉じこもっていた10人の弟子たちに向かって、そして三回目は、その一週間前にはその中にいなかったただ一人の弟子、トマスも共にいる中で言われました。つまり、イエス様の十字架の後、逃げてしまった弟子たちは、皆残らずこの主の言葉を聞いたのです。

「あなたがたに平和があるように」。—これは、今の私たち一人ひとりに語りかけられている、復活のイエス様からの声であります。私たちへのイースターのメッセージそのものです。この言葉は以前の口語訳では「安かれ」となっていました。それもとても味わい深い言葉だと思います。原語では、これはユダヤ人の日常の挨拶の言葉「シャローム」で、挨拶という意味では「おはよう」「こんにちは」とも訳せますが、その中身は「あなたに、神様の平和（平安）があるように」という祝福の祈りと言っても良い言葉なのです。

### [1] 絶望と恐れの中に入っただけでこられる主イエス

今日の箇所ですが、なぜ、主は閉ざされた扉をすり抜けるようにして入っただけでこられたのか、それについて納得できるような説明を聖書は致しません。それよりも、それによって彼らの心に何が起こったのかを書きます。—「弟子たちは、主を見て喜んだ」、と。大の男たちが大喜

びしました。恐れに支配されていた彼らの心は、復活の主と出会うことによって、解放されたのです。これが主イエスの力、そして聖霊の力です。今日、礼拝の招きの聖句として挙げた聖書の言葉は、この時に彼らの中に起こったことを表現していると思います。「御父は、わたしたちを闇の力から救い出して、その愛する御子の支配下に移してくださいました。わたしたちは、この御子によって、贖い、すなわち、罪の赦しを得ているのです。」(コロサイ 1:13~14)

考えてみると、この時の弟子たちは、もう全く「行き場所」を見失っているのですね。「鍵をかけて」とありましたが、これは、単にユダヤ人たちを恐れていたということもですが、“行き場所”の袋小路という以上に、“生きる場所”という意味での「**生き場所**」を喪失していて、殆ど絶望の暗闇の中に弟子たちは自ら閉じこもっていたと思うのです。誰かがリーダーシップを取って励ますというようなことはなく、ここで支配しているのはコロサイの信徒への手紙でパウロが言うような、正に「**闇の力**」です。これを突破する力を弟子たちは持っていません。無力です。無力どころか、「もう死んでしまいたい」とさえ思っていたのではないかと私は思います。でも、**復活の主の力**は、そういう**どん底**の中に働かれるのです。しかも、乱暴に、力づくでこの部屋に入って来たのではないのです。日常の挨拶のように「**シャローム**」と言って、**彼らの「真ん中に」、絶望と恐れの中に入ってきて、立っておられるのです!**

しかも、主はご自分の体の傷をハッキリと示されています。これはイエス様の「ほら見ろ、お前たちのおかげでこんな目にあつたぞ」ということでしょうか?そんなことはありません。私はここでイエス様が傷一つない復活の栄光に輝くお姿で現れなかったことに、大きな慰めを感じます。(そういうことも可能だったはずです)。今、弟子たちは自分たちの弱さと不信仰の故とはいえ、本当に心傷ついているのです。その時、主があ**の十字架による手足とわき腹の傷跡**を示されながら「**シャローム**」と言われ真ん中に入って来られたことは、正に、**傷ついた彼らに連帯した主イエス様**(=まことの神であり、まことの人である主イエス様)のお姿そのものだったように思うのです。彼らは、一瞬にして自分たちが「**赦された**」ことを受け止めたのだと思います。理屈抜きに!**「主を見て喜んだ**」とはそういうことではないかと思えます。「**わたしたちは、この御子によって、贖い、すなわち、罪の赦しを得ている**」という事実を、弟子たちは、この時体験したのです。そして彼らは、復活の主イエス様から**聖霊**を与えられて、この主を伝えるために遣わされて行くのです。「**生き場所**」を見失っていた暗い空間が、もう鍵などいらぬ、主の光の中で歩みだす、新しい出発点に変えられたのです。自分の力ではなく、ただ主の霊によって!

## [2] トマスと主イエスの出会い

その後でヨハネ福音書は、一人の人**トマス**という弟子にスポットを当てます。私はこの記事が聖書にあることがとても嬉しいと思っています。とても慰められます。トマスは、言ってみれば、**置いてきぼり**を食った弟子です。私たちもあるのではないのでしょうか?何か自分一人だけが仲間から取り残されたような気分を味わわれるということが。そのような時は、かえって**仲間の存在そのもの**が自分を責めたててくるように感じてしまいます。

私は小さい頃、とてもコンプレックスを持っていたことがありました。体も痩せていて、どちらかというと運動が苦手でした。中学生の時だったと思いますが、チームに分かれてサ

サッカーの試合をしたのですが、私は何の役にも立たず、足手まといだったと思います。そんな中で相手のチームの人が近寄ってきて「お前なんて眼中ねえよ」と言われてしまいました。その時の「眼中ない」という言葉は、何かズッシリと鉛のように心に響きました。これは、ごく小さな体験に過ぎないことかも知れませんが、**仲間の中で一人だけが外れているような思い**は、何か酷く人生を恨みたくなるような、惨めな思いを抱かせるものだと思います。これは、例えば学生であれば「しかと」とか「いじめ」とか、社会人であれば「干される」とか、「話をスルーされる」(無視される)とか、様々な場所で変な力学が働き、**仲間から外されるという惨めさ、残酷さを経験する**ということともつながるものがあるのではないかと思います。

トマスが、なぜ皆が集まっている時にいなかったのかは分かりません。それをトマスの責任にはしてはいけません。昔、ある説教で、「トマスが取り残されてしまったのは、皆と一緒にいなかったことが一因で、彼にも問題がある」というような話を聞いて、私は、それは違うと思いました。むしろ、この後を読むと、トマスがいなかった理由は分かりませんが、主イエス様は、仲間から一人取り残され、孤独な思いの中に沈んでいたトマス**その人を目がけてお姿を現し、直接声をかけて下さっている**ではありませんか。

トマスはよく、疑い深い人間だと言われることがありますね。それは彼が、「**あの方の手**に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」(20:25)と語っているからだだと思います。「実証主義者」トマスという人もいます。けれども、彼は自分がすべて確かめた上でないと信じられないと言い張ったと言うより、私はこのトマスの言葉は、彼の中の**疎外感**から来ているように思えてなりません。このトマスの言葉の前には、「ほかの弟子たちが『わたしたちは主を見た』と言うと」とあるのです。彼は仲間が羨ましく思えた。彼も主にお目にかかりたかった筈です。

トマスは熱血漢のところがあって、ヨハネ福音書 11 章 16 節では、イエス様があのラザロを甦らされる直前、弟子たちと共にラザロの眠っている墓に進もうとされる時に、「『**わたしたちも行って、一緒に死のうではないか**』**と言った**」とありますから、結構弟子たちの中では物を語るタイプだったのかもしれませんが。そういう人にとって、交わりの中から外されてしまったということは、悔しく、悲しい事であったに違いありません。その意味では、彼のその後の言葉は、その強い口調とは裏腹に、主は、他の弟子には現れたけれども、**私は見捨てられてしまわれたのではないか**という疎外感、絶望感が叫ばせた言葉なのかと思うのです。

しかし復活のイエス様は、そのような、いわば「**心の迷子**」になってしまったトマス一人のために現れて下さったのです。そして、彼の先ほどの言葉をイエス様は全部聞いて下さっていて、「お前がそう言うのなら、どうぞ、私の体の傷跡に触れてごらん。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」と言って彼に近づいて下さいました。もうそれでトマスは十分だったのです。彼の絶望感から生まれるかたくなさは氷解しました。トマスは主のお体には触れなかったのです。実証は要らない。自分へと語られる**御言葉**が彼を癒したのです。

99 匹の羊を野に残しておいても、主は、迷子になった羊をご自分の許へと引き戻すために、見つけ出すまで捜される方です。「彼らは主を見て喜んだ」という、その「彼ら」の中

には、一人も漏れる者があってはならない、と、トマスを捜された主は、今も復活し、生きたお方として、御言葉を通し、私たち一人ひとりに向かって語って下さっています。思えば、**弟子たちは、トマスも含め、皆、主を捨てたのです。**主を十字架へと追いやったのです。恥ずかしくって主に合わせる顔など持てない者たちです。でも、そんな者たちに主は再び出会って、「**シャローム！あなたに平和があるように**」と言って下さいました。——これは私たち一人ひとりの物語です。

#### [結] 「わたしの主、わたしの神よ」と共に告白する群れ

主に出会い直した弟子たちの集団は、言ってみれば「**教会**」のひな形です。教会は、主によって、このように**赦された者たちの集まり**です。人の集まりでもある以上、トマスのように、周りから取り残されたような感覚を抱く方を生み出してしまうこともあると思います。そういう「欠け」や「ひずみ」がいつも生じる組織であることを厳しく覚えておきたいと思えます。私たちの信仰は、目に見えるもの、それは強さかも知れませんが、それに立つのではなく、目に見えないもの、それは、自分の強さに頼ることをやめ、私を愛し、私を捕らえて下さるイエス・キリストの霊に立って行って良いのです。この聖霊は、私たちの**弱さを知りつくして、また、私たちを新しく造り変えて下さる神様の息吹**です。

新型コロナウイルス感染症は、私たちに「集まる」機会を奪っています。とても悔しくて、悲しいことです。でも週報にも引用させて頂きましたが、宣教研究所の朴思郁先生が、「私たちの慣習と伝統が根本から揺さぶられる状況に直面して、私たちはいま一度立ち止まって、礼拝と教会に関する根本的な問いかけをしなければなりません。もしかしたら、礼拝をめぐる思いもよらない非常な状況は、私たちが省察や反省をしないまま、惰性的に受け止めてきたことが溜まりに溜まって引き起こされた結果なのかもしれません」と書いて下さっていて、私たちの信仰生活、教会生活を問い直す良い機会なのだと思います。私たちはとすると、「教会の集会に行ける・行けない」「奉仕が出来る・出来ない」「たくさん献金できる・出来ない」「若い人・高齢者」「多数決の法則」等々、色々な線引きで人を見てしまうことがあります。そして、「自分はこの仲間にはなれない」と思ってしまう方もいらっしゃるかもしれません。でも、それは違いますよね。イエス様の招きは、**全ての人への招き**です！**皆がイエス様の十字架によって罪赦されて、神の国に受け容れられている。「あなた方に平和があるように！」**。このイエス様の声がいつも響いている教会でありたいと思えます。そのため仕える牧師であらせて頂きたいと思えます。

「**わたしにつながっていなさい。わたしもあなたがたにつながっている**」(ヨハネ福音書 15:4)。新年度のこの聖句に私たちは依り頼みます。—今週もこの方が、私たちの交わりの真ん中に立って下さることを信じて一緒に進みましょう。主の平和の中に！

お祈り致します。—主イエス様、あなたこそ、「**わたしの主、わたしの神、わたしたちの主、わたしたちの神**」です。たとえ私たちが闇の中に鍵をかけていても、あなたは私を見つけ、あなたの光の中へと導いて下さいます。あなたの大きな愛の懐の中に安心して憩い、また、生きる勇気も与えて下さいますように。私たちを、霊的にいつも守り、支えて下さい。

愛する主よ、この不安と恐れに満ちた世界を救って下さい。あなたのシャローム・平和が満ちますように。主イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン。